椙山女学園大学教育学部紀要（*Journal of the School of Education, Sugiyama Jogakuen University*）**16**（1）: 123−135（2023）

原著論文（***Article***）

異才教育と2E 教育に関する事例的検討

Case study on the gifted and twice exceptional children education

宮川充司*

MIYAKAWA Juji*

要　旨

ギフテッドと呼ばれる異才教育に関する検討課題として，カナダの伝説的ピアニスト Glenn Gould と不登校の経験を持つランドセル俳人小林凜という異才あるいは2E の事例として取り上げ，異才教育と学校教育の関わる問題について検討し提言を行った。

キーワード：ギフテッド，異才教育，カナダの伝説的なピアニスト，Glenn Gould，不登校，ランドセル俳人，小林凜，2E 教育

Key words：Gifted, gifted education, Canadian legendary pianist, Glenn Gould, School Refusal, Haiku Poet with School bag, Rin Kobayashi, twice exceptional education

特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議

令和 4 年（2022年） 9 月24日，文部科学省中央教育審議会に設置されていた特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議が， 1 年 2 か月に亘った審議を「特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議（審議のまとめ）～多様性を認め合う個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の一環として～」にまとめた。これは，令和 3 年（2021年） 1 月に中央教育審議会が答申した『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと, 協同的な学びの実現～（答申)』の中に含まれていた「特定分野に得意な才能のある児童生徒に対する指導」に関する具体的な教育政策のために設置された有識者会議であった。「ギフテッド」（天才）と呼ばれる特異な才能をもつ子供たちへの教育的支援政策に関しての審議であった。ギフテッドは，古典的な知能指数が高く特異な才能を示す子供だけでなく，特異な才能を持つとともに学習困難とを併せ持つ児童生徒を含むものと考えられている。

この学習困難を併せ持つ児童生徒とは，LD（学習障害，限局性学習症）の子供たちだけでなく，発達障害（神経発達症群）を併せ持つ2E（twice exceptional children）の子供たちを含む考え方（杉山・岡・小倉，2009）となっている。

この審議のまとめは，2022年10月23日の朝日新聞の朝刊15面記事『「ギフテッド」理解深め支える――有識者が提言定義は見送り』[1)]に，端的にそのポイントが報道されている。「特定の分野に才能のある児童生徒」については，知能指数（IQ）等による基準・定義は弊害がでてくるのでそうした定義はせず，「特異な才能のある児童生徒の抱える困難を丁寧に把握し，それぞれの環境や条件に応じて適した対応を柔軟に講じることが必要」とした。才能は言語・数理・科学・芸術・スポーツなどの多様な領域固有のものとして捉えられるからである。また，才能の全般的な特徴を，「普通より優れた能力」，「創造性」，「課題への傾倒」といった 3 つの構成要素があるとした。

また，支援策として，①特異な才能のある児童生徒の理解のための周知・研修の促進，②（授業にとどまらない）多様な学習の場の充実等，③（教員らが才能のある子供の）特性を把握する際のサポート，④学校外の機関にアクセスできるようにするための情報集約・提供，⑤実証研究を通じた実践事例の蓄積を提言している。

また，令和 3 年11月 1 日に開催された，第 4 回特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議では，その審議のために実施されたアンケート調査の結果や，他の学校や大学・民間団体で実施されている異才教育の実践事例などが報告検討された。この有識者会議によるアンケート調査結果のうち，保護者・小学校（幼稚園を含む）494名の回答の統計分析が，中間報告として松村（2021）による「有識者会議　分析結果」として報告されている。突出した才能（ギフテッド）とされている494名のうち，突出知能（IQ130以上）は29％，突出

* 椙山女学園大学名誉教授

2022年11月 8 日受付

学力は14％，両方５％，（知能・学力に関しては）突出なし52％という結果だった。発達の凸凹はないが突出した才能児は60％だったが，2E（突出した才能に加えて，発達障害つまり発達の凸凹がある）の才能児は27％を占めていた。

同じく，その第４回会議の資料に，東京大学先端科学技術研究センターと日本財団が共同で行った「異才発掘プロジェクト ROCKET」の参加者についての分析結果を，福本（2021）が『「個才」の時代』というタイトルで報告している。このROCKET（志と特異な才能をもった子どもたちの集まる部屋・空間 Room Of Children with KOKOROZASHI and Extraordinary Talents）は，2014年から東京大学先端科学技術研究センターが日本財団からの財政的支援を受けて取り組んだ，学校に馴染めないユニークな子どもの才能開発を狙った新しい学びへの挑戦教育プロジェクトだった。この教育プロジェクトの実践については，東京大学先端科学技術研究センター中邑研究室編（2021）で，報告されている。

そのプロジェクトへの参加者は公募で募集し，2,035名の小学生以上の応募者が集まり，その中からプロジェクトに参加する128名のスカラー候補生が選抜された。その2,035名のうち，ROCKET から情報を受け取るために ROCKET パルに登録をしていた1,239名（2019年12月18日時点）のうち，578名（47％）は学校に「ほぼ行っている」，128名（10％）が「現在ほぼ行っているが不登校の時期があった」，253名（20％）「行ったり行かなかったりしている」，280名（23％）が「ほとんど行っていない」という登校頻度の状況であった。また，読み書きの困難のある登録者は28.5％を占めていた。

この ROCKET プロジェクトのスカラー候補生の関心領域は，芸術系が35人（26.9％），サイエンス17人（13.1％），テクノロジー16人（12.3％），数学７人（5.4％），歴史７人（5.4％）文学６人（4.6％）と多様な関心領域の幅が見られた。これらのスカラーの子供に，教育・心理・医療・福祉の専門家が運営スタッフとして関与し，博物館・美術館・研究施設・社会教育施設・企業・エキスパート・職人の協力を得て，様々な学びのプロジェクトを実施した。

子供たちの登校状況の変化は，プログラム前「ほぼ毎日登校していた」は27.9％，「行ったり行かなかったりしている」41.9％であったものが，プログラムの実施後は「ほぼ毎日登校していた」は51.1％と約1.8倍に増加し，「行ったり行かなかったりしている」は16.3％までに減少した。プログラム前「ほぼ登校していなかった」は30.2％だったが，プログラム後は32.6％とこれは逆に微増した。この ROCKET プロジェクトを通じて，「（興味や関心が違う）仲間と出会えた」と思った子供は62.5％，「仲間との出会いが良かった」と感じている子供が72.5％あった。家から離れた場所で学ぶ経験で精神的自立を体験した者が78.1％，ROCKET の存在が心理的安全性を高め，価値観の変容や自分の捉え直しにつながる機会となった64.1％と，不登校傾向の改善や仲間体験の価値に変化をもたらした。

異才教育に関してこうした調査結果を踏まえると，特定分野に特異な才能のある児童生徒の才能開発に取り組む場合，学業優秀の秀才あるいはスポーツ強化選手といったすでに特別な才能を示しているもしくはその素質が高い天才秀才の子供のみを教育強化対象とした従来型の対応では不十分であり，不登校等の学校不適応あるいは自閉スペクトラム症等の神経発達症群への特別支援教育的な枠組みを含む総合的な支援対策が必要ではないかと考えられる。

2E の問題を論ずる際，ギフテッド用語で示される，天才的な才能を示すと同時に，何らかの神経発達症群の特性を持つ人たちに，アスペルガー症候群 Asperger’s syndrome（アスペルガー障害 Asperger’s Disorder）が少なくないことから，杉山（2009）は社会的な適応力を持っているために職業的な成功を収めるグループを，適応型アスペと名付けている。また，岡（2009a, b, c）は，発達の凸凹があるアスペルガー症候群の中に，視覚優位型や聴覚優位型があり，その感覚特性を生かした2E 教育の重要性を提案している。

また，松村（2018）は，ポーランドの心理学者ダブロフスキー（Dabrowski, 1964）のパーソナリティ発達におけるポジティブな不整合の理論から，超活動性 Overexcitablity と呼ぶ，才能児がもつ，強い好奇心や意欲，こだわり，創造性，完璧主義といった特性が発達障害（神経発達症群）の行動に似た社会情緒的な問題を引き起こす。特定の課題に取り組むときの強い興奮・活動性は，ADHD（注意欠如・多動症）に似ている。また，感覚過敏（Arron, 1996/2008）の特徴も，超活動性の強い子供にはよく見られる特徴であるということを指摘している。つまり，ギフテッドの子供たちに見られる超活動性の特性は，神経発達症群の子供の特性とも重なり合うところがあり，仮に何らかの神経発達症群の診断が成立しないケースであっても，それらとの鑑別が困難であるということである。

アスペルガー症候群の天才ピアニスト Glenn Gould（1932–1982）

宮川（2013）は，James（2006/2007）によりアスペルガー症候群の天才とされていたカナダの伝説的なピアニスト，Glenn Gould グレン・グールド（1932−1982）の生涯を検討した。芸術や思想領域の天才に，アスペルガー症候群が少なくないことを指摘したのは，イギリスの精神科医 Fitzgerald（2004/2008, 2005/2009）である。Fitzgerald は病碩学的な方法で，天才の創造性の背後にアスペルガー症候群の持っている特定の主題に徹底的に集中できる集中力と，創造的な作品を作り出すため果てしない努力を続けることができる優れた特性が，こうした天才を生んでいると様々な天才の事例から論じている。アスペルガー症候群の天才としてピアニストのグ

レン・グールドを位置づけたのは, James（2006/2007）である。Jamesによるこの本では，ミケランジェロやニュートン，アインシュタイン，ゴッホ，エリック・サティ，ヴィットゲンシュタイン，といった錚々たる天才と並べて，グレン・グールドをアスペルガー症候群の天才としていた。ただし，杉山（2009）は，これらの天才をアスペルガー症候群とすることにはうなずける人も含まれるが，診断過剰というべき人もいるのではないかという見解を示している。

ここで少し断っておくと，アスペルガー症候群という診断名称は，アメリカ精神医学会（2013/2014）は診断基準DSM-5の改訂により，アメリカ精神医学会の診断用語アスペルガー障害Asperger's Disorderと，その包括概念である広汎性発達障害Pervasive Developmental Disordersの自閉スペクトラム症Autism Spectrum Disorderへの変更とともに，アスペルガー障害を含む5つの下位区分を廃止してしまった。さらに，アメリカ精神医学会（2022）は，DSM-5の一部修正版DSM-5-TRを発表しており，当該の自閉スペクトラム症の診断基準の一部の表記に改訂が加えられ，3か所表記上の微修正が加わったが，内容的には大きな変更がない。これは，あくまでアメリカ精神医学会での変更であり，イギリス系の精神医学会での変更ではないが，日本の精神医学会や心理学会はアメリカの学会の影響が強いので，すでにほとんどの研究者はアスペルガー症候群あるいはアスペルガー障害という用語を使用しなくなってきている。

また，世界保健機関World Health Organization（WHO）が，2018年6月に国際疾病分類International Classification of Disease and Related Health Conditions, 11th Revision（ICD-11）の普及版を公開し，2019年5月のWHO総会で採択し，2022年2月に発効している[2)]。このICD-11の「精神，行動, および神経発達的障害群Mental, Behavioural and Neurodevelopmental disorders」の中に，アメリカ精神医学会の神経発達症群Neurodevelopmental disordersと，その中の自閉スペクトラム症Autism spectrum disorderの用語はそのまま採択されている。ICD-11の精神医学領域の用語翻訳[3)]は，日本精神神経学会の草案によるため，正式にはまだ未確定である（池田，2022）。いずれにせよ，自閉スペクトラム症の特性を有する天才・異才を説明する概念としては，アスペルガー症候群という用語は，実に分かりやすい用語であるが，いずれ使用できなくなる用語ではあるのだろう。DSM-5的に表現するならば，「自閉スペクトラム症，知能の障害を伴わない，かつ言語発達の障害を伴わないAutism Spectrum Disorder, without accompanying intellectual impairment, without accompanying language impairment」（池田，2022）といった表記を使うことになるのではないだろうか。

グレン・グールドが確立したピアノの演奏芸術は，通常のコンサートを主とする直接的な聴衆を相手とする演奏会ではなく，レコードやラジオ放送・テレビ番組といったメディアを介した音楽演奏の形態を形作ったことにあった。そのアスペルガー症候群的特性は職業的にはかえってプラスになったと考えられる。アメリカ精神医学会の診断基準（2000/2008）DSM-IV-TRのアスペルガー障害あるいはDSM-5の自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder）とするには特徴的な診断除外基準「C. その社会的，職業的，または他の重要な領域における機能の臨床的に著しい障害を引き起こしている」が当てはまらないので，アメリカ精神医学会の診断基準からは診断除外例に該当するという見解を提案した（宮川，2013）。

グールドの生涯について，もっとも信頼の高い第一級資料は，グールドと25年間にわたる交流のあった精神科医Ostwald（1997/2000）が書き残した『グレン・グールド伝』である。Ostwaldの死の翌年未亡人によって出版されたその遺稿も，グレン・グールドの研究家宮澤によって翻訳されている。グールドについて, アスペルガー症候群の可能性を疑った最初の記述は，次のような記述である。

「これが正確な回想だとすれば，別の疑問が生じる。すでに四十歳を超えていた女性が生んだ第一子は，幼小のときから何らかの異常な行動を示した可能性はないのか。泣かないというのは明らかに異常である。また，手のひらをひらひらさせる動きは，言語の発達における異常と関連しており，幼児自閉症と呼ばれる発達障害を示唆する。もっとも，彼が自閉的であったなら，公的な活動におけるあの目覚ましい成功はなかったはずだ。しかし彼が後に公表した児童期や青年期の行動のいくつか――特定の物体に対する著しい恐怖心，他人への共感の欠如，引っ込み思案，孤立を好む傾向，儀式行為への強迫的な執着――は，アスペルガー症候群と呼ばれる自閉症の一種によく似ている。」（宮澤訳，pp. 32–34）

補足的な意見を述べると，Wing（1981, 1996/1998）によるアスペルガー症候群Asperger's syndromeと，自閉症を含む包括概念自閉症スペクトラム障害Autistic spectrum disordersという診断概念が欧米で広く知られるようになったのは，1980年代以降のことであり，当然グレン・グールドが生前にそうした診断を受けたわけでない。また，子供の疾患の診断概念であった発達障害（現在の神経発達障害群）の診断概念を成人の診断に適用することが重要視されたのは，それこそ今世紀になってからのことである。

20世紀が生んだ最も個性的なピアニストの一人であったグールドの在世中の人気の秘密は，その卓越したピアノの技法と音楽性は勿論だが，数々の奇行と特異な言動で彩られた伝説的なエピソードで「孤高のピアニスト」ということであった。レパートリーは，J. S. Bachを得意とし，爆発的なヒットとなった23歳の時のレコード・デビュー曲は，Bachの「ゴールドベルク変奏曲」だった。若いピアニストのデビュー曲としては大変地味なこの選曲は，当然アメリカのコロンビア・レコードのディレクターの反対にあったが，それでも

グールドは譲らず，その曲でのレコード発売となった。予想に反して爆発的な売れ行きとなった。Bach とともに，新ウィーン学派のシェーンベルク A. Schoenberg やベルク A. M. J. Berg といった現代曲が得意なレパートリーで，このちぐはぐさがまさにグレン・グールドであった。ただし，グレン・グールドに詳しいピアニストの宮田俊雄先生によると(2022年 1 月28日私信)，新ウィーン学派の作曲家たちの作品は，Bach 時代に主流であった対位法により作曲された曲があり，Bach と Schoenberg や Berg は対位法による作品という共通項があるので，グールド的にはちぐはぐでもないという。

Ostwald（1997/2000）の記述から，幼少期のグールドの音楽の才能と英才教育，それからアスペルガー症候群（自閉スペクトラム症）的な行動特徴と知られていない病理性に関わる事項を抜粋的に拾って検討してみたい。また, 宮澤（2004）はピアノ演奏家としてのグレン・グールドの年譜を作成するとともに，関連した資料を体系的に精密に整理して提示しているので, Ostwald の記述の正確な確認資料として活用できた。

幼少期のグレン・グールド

1932年 9 月　カナダのトロントで誕生。

父親は教会で合唱団に入っているような音楽好きの毛皮商。母親は声楽家・教会オルガニスト・ピアノ教師という，豊かな音楽的な教育環境に恵まれた女性だった。母親は何度か妊娠流産を繰り返し，41歳の時にやっと授かった子供がグレン・グールドだった。

乳児の時，泣く代わりにいつもハミングをしていた。手をひらひらさせる動きをした。

お座りができるようになると，母親はピアノ椅子にすわり膝の上にのせ，賛美歌やコラール，Bach, Chopin などを弾いて聴かせた。

3 歳になる前に，グレンが絶対音感を持っていることに，両親が気付いた。

1935年 3 歳から母親がピアノを教え，本を読むより先に楽譜が読めたという。

1937年 5 歳　教会で行われた父親と母親の二重唱の伴奏をした。

1939年 7 歳　パブリック・スクール（小学校）に入った頃，他の子供との社会的接触，集団活動を嫌った。他の子にボールを投げられても，触りもせずそっぽを向いた。ただ 9 歳の時には友人を作っている。母親はグレン・グールドに，トロント音楽院の実力認定試験を受験させ，最高の成績で合格させた。

10歳の時にカナダでもっとも古い音楽学校トロント音楽院 The Toronto Conservatory of Music に入学し（小学校とのWスクールに当たる），ピアノをゲレーロ A. Guerrero に師事している。

13歳でモルヴァーン・コレジエイト・インスティチュート Malvern Collegiate Institute（トロントにある high school 中等教育学校）に入学し，イートン・ホーディトリアム（トロントの大ホール）の演奏会でオルガニストとしてデビュー。14歳でピアニストとしてデビュー。15歳でピアニストとして初リサイタル。18歳で, CBC（カナダ放送協会）ラジオで，初のラジオ・リサイタル。

19歳でトロント王立音楽院 The Royal Conservatory of Music, Toronto（トロント音楽院は，グレン・グールドの卒業の年に王立音楽院となった）卒業。しかし，Malvern Collegiate Institute（中等教育学校）は卒業できず中退。シムコー湖畔の両親の別荘で一人暮らしを始めた。

グレン・グールドが，大変な神童ぶりであるが，乳幼児期はピアノ教師であった母親が早期英才教育，10歳で音楽学校に入学し，高度な音楽教育を受け一層その才能に磨きをかけ，10歳代でプロ・デビューとなったわけである。また，音楽院が音楽の才能のある子供には，年齢に関わらず早期から受け入れ，高度な音楽教育の機会を提供したことが，神童グレン・グールドのピアニストとしての成功につながった。

成人期初期（20歳代）のグレン・グールド

1955年22歳　ワシントンとニューヨークでアメリカ・デビュー。姿勢が悪い等ステージ・マナーでマスコミから酷評を受けた。

New York のコロンビア・レコードと録音＋契約し，J. S. Bach のゴールドベルク変奏曲で，レコード・デビュー。

この頃精神分析の精神科医を受診した可能性がある（極度の不安症状と摂食障害）。

モントリオールのマクギル大学の精神科医アルバート・E・モル Albert E. Moll の診察も受けている。

また, トロント総合病院の神経科医 C. リチャードソン J. C. Richardson を受診し，ラーガティル25mg（精神安定剤）・セルパシル0.25mg（統合失調症などの強力精神安定剤）の処方を受けた。いずれも, 服用量を守らないで服用すると, パーキンソン病や肝炎などの強い副作用がある薬であった。実際の服用は不明であるが，ただステージに上ったりスタジオでの録音の前に，何らかの錠剤を服用するのは，この頃のグレン・グールドの生活習慣になっていたと記述されている。

1957年24歳　2 月グールドのカリフォルニアでデビュー演奏会（サンフランシスコ交響楽団との共演による J. S. Bach のクラヴィーア協奏曲第 5 番の演奏）で，精神科医でバイオリニストの P. F. Ostwald と知り合う。

この年，レナード・バーンスタインとの共演。

ソ連（モスクワ・レニングラード）・ヨーロッパ演奏旅行カラヤン Herbert von Karajan　指揮ベルリン・フィルハーモニーと初共演。ザルツブルクで風邪・気管支炎でコンサートキャンセル。コンサートで多忙を極めたこの頃，偏食・睡眠

不足・運動不足・薬物の乱用（多剤服用），腎炎・高血圧症といった身体症状が，グレン・グールドを悩ませるようになっていった。

1959年27歳　ドキュメンタリー映画「グレン・グールド27歳の記憶」Glenn Gould on the Record/Off the Recordの制作。カナダ国立映画制作庁（CBC, CA）制作。

12月　軽い妄想的な譫妄発作。統合失調症の専門医の精神科医で音楽家でもあった，ハープシコード（チェンバロ）を自宅に持つジョゼフ・スティヴァンズJ. Stevensと知り合い，指のしびれなどの症状から，神経科の受診を勧められたが身体疾患としては特に異常はなかった。わずかなチックと転換ヒステリー（転換性障害）ではないかということだった。友人の精神科医Ostwaldは，心気症Hypochondriasis（病気不安症）と恐怖症Phobiaと後に判断した。

1961年−1962年28歳　ラジオ番組制作への熱中。身体不調でソマ（カリソプロゾール：筋骨格の痛みで中枢性筋弛緩剤）を服用。

1962年29歳　バーンスタインLeonard Bernstein指揮ニューヨーク・フィルと共演（ブラームスJ. Brahmsのピアノ協奏曲第1番）。音楽界の大御所バーンスタインに，第1楽章を二拍子の曲を六拍子で振る（ひどくゆっくり）よう要求したため，バーンスタインの怒りを買うとともに，マスコミでの不評を買った。

グールドには，音楽の演奏家に不可欠な社会性や協調性が欠けていた。この特性は，演奏を主とする音楽家には，通常は職業的に致命的な欠陥をもたらすことになった。

成人期中期（30歳代〜50歳）のグレン・グールド

1963年30歳　飛行機への恐怖，鉄道への不快感で演奏旅行を制限。

1964年32歳　演奏会活動停止宣言。以後テレビ・ラジオ・レコード録音での演奏活動が主体となる。

1965年33歳　バイオリニストのユーディ・メニューインYehudi Menuhinと共演。

1967年35歳　孤独三部作の制作に取りかかる。

1968年36歳　人との衝突の回避。

1971年38歳−39歳　映画音楽に参画。

胸腔内結合組織炎・胃腸炎・痙性結腸・前立腺炎といった身体疾患の薬を買っていたが，実際には心気症的な症状で医学的な身体所見はなかったが，内科の主治医は，グールドから求められるままに薬を処方した。

1975年42歳　母親脳卒中で逝去（83歳）。

1976年43歳　高血圧症（150／90）　かなり深刻に受け止め，主治医とは別の内科医に降圧剤の処方を受けて服薬。しかし，主治医には内密。

腹部の痙攣症状で，鎮静剤リブリウム5mg・痙攣止めクアルザン2.5mgを服用。肩の不調をうったえ，整形外科医から，抗炎症剤を受ける。インドシン25mg・ナプロシン25mg。病気や薬の影響で顔には皺が増えた。

1977年44歳　顔も体もむくみ，太り締まりがなく，前屈み。アルドメット（降圧剤）の副作用か，両腕のコントロールの不調。

1978年45歳　体調不調。

1979年11月47歳　映画『グレン・グールドのトロント』制作。

テレビのシリーズ番組『グレン・グールド・プレイズ・バッハ』撮影。

1980年48歳　CBS『グレン・グールド・ジュベリー・アルバム』発売。

緊張性頭痛にフィオリナル（バンビツール酸系のブタンビトールと，アスピリン，カフェインの合剤），抗生物質のセプトラ，精神安定剤のリブラックスとヴァリウムが主治医から処方。3月痛風とみられるが，抗炎症剤フェニールブタゾン錠100mgが処方，11月痛風のアロプリメール100mg処方，12月高血圧にヒドロクロロチアジド50mgが処方された。

Ostwaldはこれらの処方に疑問をもった。

1982年50歳　映画『戦争』のサウンドトラック制作。

9月50歳の誕生日。

脳卒中で倒れ数日後に死亡。

20世紀のニューメディアであった，レコーディングやラジオ番組・テレビ番組といったメディアを介しての演奏活動，またチェンバロといったその時代に使われていた古楽器による復元演奏ではなく，現代のピアノによるBach演奏の基本的なスタイルを作ったのはまさにグールドであったともいえる。こうした必ずしも社会全体や時代風潮に染まらず独自の活動世界を作り上げたのは，アスペルガー症候群（自閉スペクトラム症）の天才の特徴を十分に備えたグールドだからこそ，なしえたものとも考えることができる。勿論，その伝説的なピアニストとしての才能開発は，まず早期の母親による音楽の英才教育が可能であったこと，次の高度な専門教育の段階では，特に音楽の才能の高い子供には，古い時代から門戸を開いていたトロント音楽院（王立音楽院）による高等な専門教育が重要であり，またそれを可能としたのは通常の学校と音楽学校とのWスクールを可能とした教育制度によるところが大きいだろう。ただ，モルヴァーン・コレジエイト・インスティチュート（中等教育学校）側の理解も十分あったのではないかと思われる。詳細は不明であるが，おそらく出席日数の不足といったことが中途退学となった大きな理由であろう。勿論，音楽一筋のグレン・グールドにとっては大きな問題ではなかったといえるが，古い時代音楽学校が正規の学校教育とは別の専門教育学校であり，特に優れた音楽的な技量さえあれば年齢にかかわらず学生生徒として受け入れ

ることが可能であったことにより，Wスクールが可能となったことが，学歴上も大きなダメージを与えなかった一つの理由であるといえよう。不登校や学校外の特異な活動による出席不足による中途退学といった，子供時代にプロフェッショナルな活動を始めた異才あるいは子供タレントなどに，共通に関わってくる学業との両立の問題であり，学校教育制度の問題として一つの検討課題を残しているといえる。

（生前十分に気付かれていなかった）グレン・グールドの生来のアスペルガー症候群的な特性は，ピアニストという職業的には，社会性が乏しいといった特徴は一般的には音楽の演奏家には致命的な困難を引き起こす可能性が高いが，最も幸福な出会いつまりラジオやテレビ，レコードといったメディアとの出会いが，それらを介したグレン・グールドの音楽という大きな特徴を形作ったといえる。しかし，アスペルガー症候群の特性や疾病恐怖から生まれた心気症，（麻薬や覚醒剤ではないが，健康被害をもたらすような多剤服用の習慣となった）薬物依存，不規則な食生活といった特徴に，結果的に大きく健康な生活を維持するという側面では，不幸な結果をもたらしたと考えられる。

2E の障害の側面，アスペルガー症候群（自閉スペクトラム症）の診断除外例とした見解（宮川，2013）に，若干疑問が出てくるかもしれない。

グレン・グールドは，音声過敏の他，身体過敏といった感覚過敏があり，音声過敏はピアニストとしてはプラスに働いたとしても，その身体過敏の特性と疾病恐怖の特性が生涯にわたって苦しめた心気症的な症状の背景になった可能性が高いが，治療に関わった医師たちが，そのことに気付いて適切な治療を行ったかどうかは大きな疑問が残っている。この心気症的症状というのも，当時の診療を行った医師も見逃していた自閉スペクトラム症（アスペルガー症候群を含む）の症状の一つ，「行動，興味，または活動の限定された反復的な行動様式」の現れという捉え方も可能性があり，それが主治医とグレン・グールド自身にあった場合，過度な薬物の多剤投与・服用による副作用による健康を損なうといったことがある程度防げたのではないかと考えられるのではないだろうか。

ランドセル俳人小林凜

2010年代の初め，朝日新聞の日曜版に掲載される朝日俳壇で，ランドセル俳人という異名で知られた俳人がいた[4)]。ランドセル俳人というのは，ランドセルを背負った，つまり小学生の俳人ということであった。朝日俳壇は，朝日新聞が主催する紙上の俳壇であり，新聞社に投句されてきた俳句の中から，4 人の選者がそれぞれ10句ずつ選句して掲載するものである。投句ははがき 1 枚に 1 句未発表の新作を書いて送付するだけなので，小中学生も投句は可能であるが，それが実際にプロの俳人の目にとまり選句掲載されるかとなると，かなり高いハードルがあるはずである。かなり俳句に手慣れた人が投句をしても，実際にはなかなか掲載とはならない。そうした朝日俳壇に，しばしば作品が掲載された小学生がいた。当時の朝日俳壇の選者金子兜太や長谷川櫂の目に留まった。それが，当時小学生 3 年生の小林凜であった。小林凜という俳号は，好きな俳人小林一茶にあやかり小林の名字を取ったもので，実名ではないということなので，以下匿名とせずその俳号のままで記述する。

この小学生俳人，小学校 6 年生となった 4 月に，最初の句集『ランドセル俳人の五・七・五　いじめられ行きたし行けぬ春の雨』（母親と祖母による成長と出来事が随所に挿入）を出版する。中学校 1 年の 9 月には，日野原重明との往復書簡集を収録した『冬の薔薇　立ち向かうことを恐れずに』を出版する。高校 1 年の時には 4 月に『ランドセル俳人からの「卒業」』（俳句・エッセイ集），7 月に句集『生きる　俳句が生まれる時』を出版するなど，紛れもない天才的な子供俳人であった。

しかし，この子供俳人のもう一つの姿は，小学校 1 年の時から同級生からの壮絶ないじめに見舞われ，また教師の心ない言葉や対応で傷つけられ，小学校 6 年の時を除き，小中学校を通してかなりの長い期間不登校の状態が続いた。俳句はそうした子供の心の支えであり，日々いくつもの俳句が綴られていったという。

小学校 6 年となった 4 月に出版された最初の句集『ランドセル俳人の五・七・五　いじめられ行きたし行けぬ春の雨』には，母親による凜の成長と出来事を綴ったエッセイが随所に挿入され，それらの俳句が生まれた背景について理解する情報を提供している。また，中学校 1 年の時の『冬の薔薇　立ち向かうことを恐れずに』以降は，作家本人が体験したさまざまな出来事や作品の解説を綴っている。

高校 1 年の 4 月に発刊した『ランドセル俳人からの「卒業」』（俳句・エッセイ集）では，小学校での壮絶ないじめと教師の心ない対応，中学校に入ってからもなおいじめや教師の不適切な生徒指導とその間に生まれた作品について，作者本人のエッセイと作品で綴られている。また，その年の 7 月に発刊した句集『生きる　俳句が生まれる時』でも，同様に小中学校での様々な出来事と小動物や植物との関わり，高校進学に関わるエピソードなどが，作品とともに綴られている。こうした母親の記事や凜本人が書いていったエッセイなどから，以下，異才の俳人小林凜の生まれてから高校入学頃までの出来事（ライフイベント）を，年代順に抽出し検討してみることにする。

2001年 5 月　出産予定日より 3 か月早く早産，944g の超低出生体重児として誕生。

長い保育器治療（推定で 3 か月程度）から退院した後も，何年か小児科・眼科・脳外科に通院が続いた。水頭症発症の

懸念もあり，年1回のMRI検査が必要だった。

2002年3月10か月　母親と父親別居。母親と母方の祖父母の家に転居し4人暮らし。

1歳の時　母親が教職に復帰，日中は祖母が世話をした。RSウイルス感染症，喘息様気管支炎などで度々入院。（母・史「今日も張り切って不登校―そして凜の俳句が生まれた―」『ランドセル俳人の五・七・五』pp. 10−17）

2006年4月4歳　カトリック系の私立幼稚園入園。シスターの温かいまなざしに見守られて幸せな2年間があった。

「この頃，凜はテレビや絵本で俳句と出会う。私や祖母から，俳句を教えたことはない。だが，気づけば，自分の思いを指を折らずとも，五・七・五の十七文字で表現するようになった。凜の口から次々と溢れ出す十七文字を，私と祖母は驚嘆し，時に涙しながら，ノートに書き留めていった。」（母　『ランドセル俳人の五・七・五』p. 11）

凜本人の記述によると「俳句を作り始めるきっかけは，幼稚園の頃読んでいた『にほんごだいすき』という絵本だった。その後も，NHKのこども番組「にほんごであそぼう」で俳句をつくる機会があった。五・七・五のリズムが幼い僕の心に響いたのか，気付けばそのまね事で自分の思いを五・七・五の型にはめるようになっていた。」（『生きる　俳句が生まれる時』p. 6）

字を覚えてから本を読むことが大好きになり，物語から科学小説，理科系の読み物に興味津々，ユーモラスなフィクションも読み出すと止まらない。しかし，筆圧が弱く，絵を描いたり，文字を書いたりすることが苦手だった。卒園時には体格もようやく平均に追いついてきたが，脚力も腕力も弱かった。（『ランドセル俳人の五・七・五』pp. 11−12）

予定より早産で低出生体重児（2,500g未満）として生まれた子供は，特に死亡率や未熟児網膜症や発達の遅れや発達障害（神経発達症群）等の疾患の危険性が高いので，ハイリスク児と呼ばれる場合が多い。発達診断については，早く生まれた分を差し引いて評価するが，それでも発達・発育が遅れている場合も珍しくない。この子供の場合は，身長・体重といった発育の面は，幼稚園を終える頃には平均に追いつき目立たなくなっていったが，それでも視覚発達や運動発達の側面での発達の遅れは残っていたということであろう。運動発達に関しての遅れは，同年齢の子供と比べて小学校低学年くらいまで持ち越したとしても，特別なことではないが，こうした特徴が小学校入学後の他の児童からのいじめの標的にされた1つの要因となり，学級担任も児童への指導力不足といった可能性は否定できない。

言語発達や知的発達という側面では，幸い発達の遅れどころか逆に進んでいた可能性も高いだろう。言葉遊びに興味を覚える子は珍しくないにせよ，幼児の段階で五七五という言葉のリズム遊びに興味をもち，しかもそれが一時的なものではなく，長いこと継続していったというところが，やはり特異であろう。勿論，それを家族が支えたことが大きい。

2008年4月6歳小1　小学校入学。視知覚に問題があり，距離感が取りにくく，通学路での転倒事故等懸念があったため，祖母か母親同伴の登下校。しかし，外見・行動的特徴に，他の児童の標準と異なることがあったため，他の児童から，いじめや差別の標的にされてしまったようである。

歩くのがぎこちないので，バランスを取るために両手をひらひらさせながら歩くのを，同級生から「オバケみたい」とか「りんがきた」とか教室から閉め出され，教室の中に入れないなどのいじめを受けた。入学1週間後，後ろから突き飛ばされて顔面強打，目があけられないほど腫れ上がった。学校からの連絡はなしで，担任は「一人でこけた」と連絡。

乱暴な同級生に，つねられ，たたかれ，体はあざだらけ。危険ないじめの標的にされた。同級生から，突き飛ばされて，大きなあざができるといったことが度々起きた。

祖母が見かねて，学校に話に出かけるが，担任も教頭も，一応話は聞くが対処するようすもなかった。（母・史　「今日も張り切って不登校―そして凜の俳句が生まれた―」『ランドセル俳人の五・七・五』pp. 10−17）

祖母が一日参観を申し出，参観に行く。クラスの児童が凜の本を奪って，数人でパスしてからかうなど，同級生がいじめの標的にしていたのを祖母が目撃。

二学期になってもいじめは解決せず，いじめで職員室に逃げ込んでも，教師は見て見ぬふり。担任はいじめを否定。通級指導教室の先生が，身柄を引き受けることになった。（「薔薇の先生」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 20−22）

後に凜から薔薇の先生と呼ばれることになったこの通級指導教室の心温かい先生の存在が，凜の学校における心と安全の大きな支えとなったことだけは，唯一の幸いであったといえよう。通級指導**教室**は，通常学級に学籍を置いている児童生徒で，本来支援対象となるのは障害の程度が軽度，あるいはLD学習障害（DSM-5の用語では限局性学習症）やADHD注意欠如・多動性障害（DSM-5では注意欠如・多動症）あるいは知的能力に障害のない高機能自閉症・アスペルガー症候群（DSM-5では自閉スペクトラム症）などで個別の支援を必要とする児童生徒に，週あたり数時間の取り出し指導をするために設置されている**教室**である。この児童の場合，超低出生体重児であったため，少なくとも小学校低学年の頃で

も，不器用さや歩行や動作等軽度な運動発達の遅れが見られた（発達臨床的には，発達性協調運動症 / 発達性協調運動障害 Developmental Coordination Disorder という学校現場ではまだよく知られていない運動発達の障害の疑いもあったかもしれない），立体視といった視覚的な空間知覚に若干の視覚障害が残っていた，あるいは教室での学習の困難が見られたので，この通級指導教室の支援対象にはなり得たのかもしれないが，そういう特別支援教育的対応での選択というより，いじめの避難シェルターとして通級指導教室が活用されたというのは非常に珍しい適用事例で，いじめ対策としては非常に希な好事例といえるだろう。ただ，小学校低学年で，いじめの被害防止のために通級指導教室を利用しないといけないこととなったのは，小学校教育のいじめ対応や特別支援教育，あるいは異才教育のありかたに課題を投げかけていることは間違いないだろう。

また，いじめっ子というのは昔から児童の世界には存在したものであるが，数人のいじめグループあるいはクラスぐるみの集団的ないじめに発展している疑いもあるいじめの様態になっているので，やはり学級担任の学級づくりや生活指導力が問われる事態であったといえる。いじめの対策としては，まずいじめの被害者となっている児童の人権と安全を保証する対応をしなければならない。またそれだけではなく，ガキ大将あるいはいじめのリーダーとなっている児童生徒も，実は発達障害（神経発達症群）やネグレクト等の児童虐待の被害者といった疑いがあることも珍しくないので，こちらはかなり熟練した児童への個別の指導力や対応が必要であり（場合によってはスクールカウンセラー級の高度な理解力や対応力を必要としているかもしれないが），なお教師による学級全体の指導力が不可欠であるが，教師がそうした力量が不足していた可能性も否定できないかもしれない。

文部科学省統計（文部科学省初等中等教育局児童生徒課，2022）による小学校における暴力行為の発生件数やいじめ認知件数，不登校児童が，急激に伸び始めたのは奇しくもこの2006年度（平成18年度）からであるので，当時の小学校の先生たちの間では，いじめに対する認識や対応力が不十分であったという推測をしたとしても，おそらく担任教師の生活指導力が不十分であった可能性は否定できないだろう。やはり，特別な配慮を必要とする児童を含む多様な児童の指導力は学校の教諭には不可欠の職業的能力となるので，大きな課題を残しているといえるだろう。

ある夜のこと，いじめられてもめったに言葉に出さずに，小さな胸で耐えていると思うと不憫で，（祖母が）つい聞いてしまった。
「凜，生まれてきて幸せ？」
「変なこと聞くなあ。お母さんにも同じこと聞かれたよ」と。そして，凜は沈黙の後，一句。

生まれしを幸かと聞かれ春の宵
（「生まれしを幸かと聞かれ春の宵―祖母・郁から凜へ―」『ランドセル俳人の五・七・五』pp. 40–41）

「生まれて幸せ」といった子供自身には答えられない（あるいは言葉にしてはいけない）問をされた凜少年，すでに俳句特有の巧みな表現力で直接的な回答を避ける形で応じていたと考えられ，異才の小学生俳人の一端を示す一句とエピソードであろう。

2009年 4 月 7 歳小 2　2 年生になってもいじめはやまず，後ろから足首をつかんで転ばせられようとされる，給食当番で熱い給食の鍋を当番二人で運んでいると，廊下で足を蹴るなど危険ないじめがあった。

オタマジャクシ　隣のクラスの女の子からオタマジャクシをもらった。それをクラスの男子 3 ～ 4 人が見つけて「よこせ」と追いかけてきた。最後は男の子に取り押さえられ，女の子に奪われた。それをガキ大将に渡され，ガキ大将がオタマジャクシのビニール袋にはさみを入れようとした。担任が教室に入ってきたが，ガキ大将が「凜からオタマジャクシを奪い返した。凜に返したら勉強せえへんで」といった。担任が「授業が終わるまで預かる」といって持って行った，授業が終わって，先生にオタマジャクシを返してほしいといったが，「ない，どこかいった」といって，結局オタマジャクシが返されることはなかった。

春の虫踏むなせっかく生きてきた
（「オタマジャクシ」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 28–30）

2 学期の秋，自主休学，つまり不登校をする選択をした。

冬蜘蛛が糸に絡まる受難かな
（『ランドセル俳人の五・七・五』p. 68）

3 学期なんとか登校を再開。

2010年 4 月 8 歳小 3　3 年生になって体は成長したが，低出生体重児特有の頭の大きさがあったため，岩石頭とからかわれ，敏捷性がなく運動の苦手なぎこちない動作もからかいの対象になり，連日いじめられた。

たまりかねた祖母が，担任に頼み，教壇に立って「凜は小さく産まれたの。一生懸命皆に追いつくようにがんばっているのだよ」という訴えをしたが，それが裏目に出て，「胎児頭」という残酷なからかいに繋がった。

(「いじめは収まらず―でも僕には俳句がある　母・史 「今日も張り切って不登校―そして凜の俳句が生まれた―」『ランドセル俳人の五・七・五』pp. 24–29)

祖母と交流のあったニューヨーク在住のカニングハム久子氏に，凜の俳句を送るようになった。句とともに絵も描くようにという助言があり，その都度，カニングハム久子氏に送った。凜という俳号は，カニングハム久子氏の命名だという。家族で俳句入門書を買って，俳句の約束事を一緒に学び始める。(母・史 「今日も張り切って不登校―そして凜の俳句が生まれた―」『ランドセル俳人の五・七・五』p. 17)

12月 9 歳　朝日俳壇に投句　選者長谷川櫂により選句掲載[4)]。

紅葉で神が染めたる天地かな
(『ランドセル俳人の五・七・五』p. 55)

これを契機に朝日俳壇に度々投句。

影長し竹馬のぼくピエロかな
(金子兜太選　2011年 2 月朝日俳壇)
黄金虫色とりどりの動く虹
(長谷川櫂選　2011年 6 月朝日俳壇)
万華鏡小部屋に上がる花火かな
(金子兜太選　2011年 7 月朝日俳壇)

2011年 4 月 9 歳小 4　東日本大震災の後，家族の名前を書いたカードを掲げて避難所を探す同じ年頃の小学生の記事を見て作句した一句。

名を掲げ避難所まわる九歳よ　(『冬の薔薇』p. 76)

6 月10歳　母親が聖路加国際病院名誉院長の日野原重明氏（1911–2017）の朝日新聞掲載「災害と宮澤賢治」のエッセイを読み，日野原氏に「いじめを俳句で乗り越えている小学生」のことを書いた手紙を送ったところ，返事が来た。それをきっかけに，日野原氏と小林凜の交流が始まった。

この年の秋（10月）日野原先生が百歳になられたことを知り，句を詠んで贈った。

百歳は僕の十倍天高し
(「日野原先生との出会い」 小林凜 『冬の薔薇』pp. 76–77)

9 月12日　朝日新聞夕刊 「10歳のいま刻む五七五　貝見れば海の思ひ出香り立つ」（宇佐美貴子記事）の署名記事で取り上げられる。

4 年生の時，朝日新聞の招待で俳句講座に参加し，選者の長谷川櫂先生と対面した。

特殊な才能をもった子供(この場合は俳句の才能であるが)に対しての才能教育は，ある程度高度な水準での指導となってくると，次第に限られた高度な専門家しか指導できない状況になってくる。この場合は，児童生徒の才能開発に対して関心を持ち，高度な指導ができる朝日俳壇の選者との出会いが，その役割を発揮したといえよう。

2012年 4 月10歳小 5　給食の食器を返却するため運んでいた凜を，6 年生が階段から突き飛ばす事件があった。その生徒の教室に追いかけていったところ，頭突きを受け，その担任から突き飛ばしたことを示す証拠を出せと言われ，逆に叱られた。その場を目撃した別の先生が，言葉を挟んだ。
(「受難は続く」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 34–39)

音楽の片付けをしていた時に，同級生から「消えろ，クズ！」と言って突き飛ばされた。授業の終わりに，先生が「問題を起こした者立ちなさい」といったが，被害者なので立たなかったら，同級生が「立て立て」と避難。母親が抗議したが，「喧嘩両成敗です」と逆に声を荒らげられた。こんなことから，再び 9 か月間不登校。
(「喧嘩両成敗」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 50–58)

同級生からのいじめだけでなく，学級担任からの無理解や不適切な対応で苦しめられている姿が記載されている。同年齢の他の児童とはどこか変わった異才の子供は，教師からは問題児のような扱いになってしまっていたということであろう。

7 月11歳　祖父逝去。

蓮の花祖父を送りて沈みけり
亡き祖父の箸並べけり釣忍
(『ランドセル俳人の五・七・五』p. 37)

8 月　不登校のため家庭訪問をした教頭先生の前で，原爆の句を即興で詠む。教頭先生は驚きの表情をされた。

形無し音無しけれど原爆忌
(『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 41–42)

この句は，6 年生の 2 月に出版された朝日俳壇の選者長谷川櫂監修『大人も読みたいこども歳時記』（小学館）でも取り上げられることになった。

この頃作句されたいじめられの句。

いじめ受け土手の蒲公英一人つむ
（『ランドセル俳人の五・七・五』p. 3, p. 23）

そこにはいじめで苦しめられている，ひとりぼっちの寂しい小学生がいた。

いじめられ行きたし行けぬ春の雨
（『ランドセル俳人の五・七・五』p. 3）

『ランドセル俳人の五・七・五』のサブタイトルになっている句である。いじめのために不登校となっている子供の学校に行きたい気持ちはあるが，それでもいじめの標的にされるのが怖くて行けないという，複雑なジレンマの自分の気持ちが率直に表現されている秀句である。自分自身の心理的な観察描写も鋭い上，泣きたい気持ちあるいは涙とせずに春雨とした置き換えによる間接的な表現が，すでに高い表現技法を自分のものとしている，ランドセル俳人の代表句といえる叙情を醸し出している。

2013年 3 月　桜が満開の公園を祖母と散歩をしていたら，「消えろ，クズ！」と罵った同級生と出会ったところ，「いじめてごめんなさい」と謝ってきた。そこで一句。4 月から再び登校することにした。

仲直り桜吹雪の奇跡かな
（『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 51–52）

2013年 4 月11歳小 6　『ランドセル俳人の五・七・五―いじめられ行きたし行けぬ春の雨―』（ブックマン社）出版。

6 年生になり，通級指導教室に通級していた。優しい若い先生が学校に着任してきた。下級生に暴力を振る舞われ，話し合いになったときも，「ぼくも見ていました」と事実を証言していただいた先生がいた。この若い先生は，程なく暴れている児童を止めに入ったため巻き込まれ，けがを負って病院に入院したために会えなくなった。後にこの先生から，保健室の養護の先生となったというお手紙を受け取った。

保健室天使のいれば春日差す
（『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 52–58）

7 月12歳　聖路加国際病院に名誉院長の日野原重明氏を訪問。

百歳の師に抱かれた夏休み　（『冬の薔薇』pp. 78–79）

11月　松阪市立小野江小学校から招待を受け，6 年生と交流。（『冬の薔薇』pp. 116–130）

母は「もう一度，小学校をやり直させてやりたい」と何度も言っていた。けれど，小野江小学校との出会いによって，ほんのひとときでも小学校生活を味わうことができた。そんな気がする。

僕はこのことを一生忘れない。

コスモスの一輪ごとに輝きぬ
コスモスに囲まれし我涙かな　（『冬の薔薇』p. 123）

2014年 2 月12歳　長谷川櫂監修『大人も読みたいこども歳時記』（小学館）が刊行され，小林凜の作品18句が選句掲載された。

2014年 4 月12歳中 1　いじめを避けるために公立中学校を避け，私立中学校に入学したが，すぐに同級生からシャープペンシルを目に振りかざされる，窓から突き落とされそうになるなど，暴力的ないじめを受けるものの，「対処します」といいながら，教師は取り合わないどころか，凜の身体的弱点を口にするなどのアクシデントがあり，3 週間で転校。しかし，約 1 か月転校先の受け入れ中学校が決まらなかったが，校区とは別の公立中学校に転校。

あざみ咲く終いの学舎と願いけり
（「あざみ咲く学校」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 60–67）

2 つ目の公立中学校でも，いじめや教師による暴言や不適切な生徒指導を受けることになった。上級生からの嫌がらせや暴力も始まった。教室ではバイ菌扱いでのけもの。

体育の教師からも，連帯責任と称した罰として炎天下運動場を走らされるなど，度々厳しい指導を受けた。

相手の聞き違いで「きしょい」（気持ち悪い）と言ったということで（冤罪），夜七時頃まで居残りで，4 人の先生から謝罪を強要された。

こんな時にも一句。

黙るしかできぬ吾のそば蛙鳴く
（「連帯責任」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 80–86）

いじめを受けていることを学年主任に相談，教育委員会を交えて話し合いをしたが，教師がいじめを否定。

9 月13歳　日野原重明との往復書簡集を収録した『冬の薔薇　立ち向かうことを恐れずに』（ブックマン社）出版。

2015年 1 月　3 学期から別室登校。

前年の2013年 6 月にいじめ防止対策推進法が制定され，

9月に施行されているが，この中学校までは浸透していないようであった。

2015年4月13歳中2

6月14歳　仲間はずれなどいじめは止まらない。別室登校を希望したが，学校側により拒否され，再び家庭学習を選択（不登校）。

踏まれじと蝉の抜け殻野に寄せて

（「再びの不登校」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 76–78）

2016年4月14歳中3　新しく赴任した教頭や学級担任が家を訪ねてくるも不登校。

10月15歳　関東と関西の高等学校案内パンフレットが，ファンと称する人から送られてきた。

漫画家の西原理恵子との共著で，『【日めくり】学校川柳―ボクとワタシの，毎日をおかしむ発想―』（教育開発研究所）出版。

11月15歳　進路希望の1つ関西にある高等学校見学。

2017年2月　高校受験。希望校に合格。

2017年3月15歳　中学校卒業。卒業式には欠席。卒業証書は，教頭先生が3月末に自宅に届けた。

卒業式苦難の日々のエピローグ

（『ランドセル俳人からの「卒業」』p. 151）

2017年4月15歳高1　関西にある高等学校普通科スーパーコースに入学。新聞社の元編集長が，そのコースで文章講座の指導にあたる高等学校だった。

春風に背中押されて高校生

（『生きる　俳句が生まれる時』p. 88）

7月16歳　日野原重明先生逝去。青山葬儀場での告別式に参列。

百六のヒーロー秋の空をゆく

（『ランドセル俳人からの「卒業」』p. 153）

（「恩師との別れ」『ランドセル俳人からの「卒業」』pp. 148–155）

2018年4月16歳高2　『ランドセル俳人からの「卒業」』（ブックマン社）出版。

7月17歳　『生きる　俳句が生まれる時』（小学館）出版。

公刊されている資料から異才の俳人小林凜の半生について，誕生から高校入学頃までのいじめと教師による心ない対応，その生きる力を支えてきた俳句作品の一端について触れてきた。早産の超低出生体重児で生まれたため，小学校入学頃はまだ視知覚や運動発達に遅れが残っていたため，その外見的行動的な特徴から，同年齢の児童からひどい差別といじめの対象にされてしまった。また，何らかの特別な配慮を必要とした児童でありながら，そのことに対しての小学校側の理解や支援も限定的であったため，不登校となった。中学校になってからは，いじめの手段も一層悪質で危険なものとなった。また教師にしても古典的な集団画一主義的な価値観に基づく，平均的な他の生徒と変わった異質な生徒に対する行き過ぎた，一方的で不適切な生徒指導上の対応など，異才児教育以前の問題ではないだろうか。また，いじめの被害者からの訴えに十分に声を傾けず，保護者をモンスター・ペアレントのような扱いで，本質的な教育的対応をせず放置した。そのことから派生した不登校といった，個別の支援を必要としている児童生徒に対して十分な支援を怠る等，今日学校に求められているいじめ対策（重大事態への対応）や特別な配慮を必要とする児童への対応からは考えられない対応の連続であった。そうした厳しい状況下で，この異才の俳人の生きる力を支えたのは俳句の創作活動だったというのは，最大の救いであったといえる。

この論考では，特別な才能をもった異才の子供に対する才能教育について学校や社会としての課題の検討が，主な目的であった。多様な分野で特異な才能をもつ子供の才能開発に対して，秀才といった直接的な教科の学力に関する場合（例えば，スーパー・サイエンス・スクールに進学した理数系の高い能力を有する生徒，大学が試み始めたジュニア・ドクターと呼ばれる児童生徒向きの学習セミナー塾，飛び級による大学進学など）を別にして，日本の学校教育が特異な才能を秘めた子供の発見と才能開発に対して果たせる役割は限定的である。また，先行している研究や実践例が示しているように，特異な分野で高い能力や才能をもつ子供は，しばしば2Eと呼ばれる自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症などの神経発達症を併せ持つ事例も珍しくないのであり，またその障害特性により他の子供（時には学校の教師と）との関係に派生した不登校その他の問題が生じたり，あるいは同年齢の子供とその並外れた才能や能力のために逆に他の子供との関係や学校適応に問題が生じているケースも少なくない。何らかの特別な配慮を必要とする児童生徒に対する対応能力は，特別支援教育担当の限られた教員にのみ求められることではなく，全ての教員に求められる事項となってきている。障害があろうがなかろうが，天才と呼べるような特別な才能があろうがなかろうが，古い時代の集団画一主義的な価値観から脱皮し，多様な特性の子供の個性を受け入れ，それぞれの可能性を伸ばしていけるような多様性ダイバーシティの価

値観に基づいた学校の教育環境の実現が，学校教育における異才教育の基本といえるのではないだろうか。

注

1）朝日新聞「「ギフテッド」理解深め支える―有識者が提言 定義は見送り」2022年10月23日朝日新聞朝刊15面記事

2）公益法人日本WHO協会　https://japan-who.or.jp/news-releases/2202-23/

3）Neurodevelopmental disorders 神経発達症群 ICD-11：ブログ：滋賀・京都のカウンセリングルーム認知行動療法のCBT センター　https://cbtcenter.jp/blog/?itemid=2064

4）朝日新聞「10歳のいま刻む五七五　貝見れば海の思ひ出香り立つ」（宇佐美貴子記事）2011年 9 月12日　朝日新聞夕刊記事（小林（2013）pp. 4–5にも写真掲載）

引用文献

American Psychiatric Association.（2000）*Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fourth edition. Text Revision; DSM-IV-TR*. Washington, D.C.: American Psychiatric Association.（高橋三郎・大野裕・染矢俊之訳 2008 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院）

American Psychiatric Association.（2013）*Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fifth Edition: DSM-5*. Washington, D.C: American Psychiatric Association.（日本精神神経学会日本語版用語監修 高橋三郎・大野裕監修 染谷俊之・神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉訳 2014 DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院）

American Psychiatric Association.（2022）*Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fifth Edition Text Revision: DSM-5-TR*. Washington, D.C: American Psychiatric Association.

Aron, E. N.（1996）*The highly sensitive person: How to thrive when the world overwhelms you*. New York, NY: Birch Lane.（冨田香里訳　2008　ささいなことにもすぐに「動揺」してしまうあなたへ　ソフトバンククリエイティブ）

Dabrowski, K.（1964）*Positive disintegration*. Boston, MA: Little Brown.

Fitzgerald, M.（2004）*Autism and creativity: is there a link between autism in men and exceptional ability?* Oxfordshire, UK: Bruner-Routledge, Taylor and Francis Goup.（石坂好樹・花島綾子・太田多紀訳 2008 アスペルガー症候群の天才たち―自閉症と創造性― 星和書店）

Fitzgerald, M.（2005）*The genesis of artistic creativity*. London, UK: Jessica Kingsley.（井上敏明監訳　倉光弘己・栗山昭子・林知代訳 2009 天才の秘密―アスペルガー症候群と芸術的創造性― 世界思想社）

福本理恵（2021）「個才」の時代　令和 3 年11月 1 日開催特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学級における指導・支援の在り方等に関する有識者会議第 4 回資料（https://www.mext.go.jp/content/20211105-mext_kyoiku02-000018576_03.pdf）

長谷川櫂監修　季語と歳時記の会（2014）大人も読みたいこども歳時記　小学館

池田健（2022）ICD-11・DSM-5準拠　新臨床家のための精神医学ガイドブック　金剛出版

James, I.（2006）*Asperger's syndrome and high achievement: Some very remarkable people*. London, Jessica Kingsley.（草薙ゆり訳 2007　アスペルガーの偉人たち　スペクトラム出版）

小林凜（2013）ランドセル俳人の五・七・五　いじめられ行きたし行けぬ春の雨　ブックマン社

小林凜（2018a）ランドセル俳人からの「卒業」 ブックマン社

小林凜（2018b）生きる　俳句が生まれる時　小学館

小林凜・日野原重明（2014）冬の薔薇　立ち向かうことを恐れずに　ブックマン社（日野原重明との往復書簡集を収録）

松村暢隆（2018）2E 教育の考え方―才能と障害のマイノリティからの発達的多様性へ―　松村暢隆編（2018）2E 教育の理解と実践　金子書房，pp. 1–12

松村暢隆編（2018）2E 教育の理解と実践　金子書房

松村暢隆（2021）有識者会議結果分析　令和 3 年11月 1 日第 4 回特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学級における指導・支援の在り方等に関する有識者会議資料（https://www.mext.go.jp/content/20211105-mext_kyoiku02-000018576_02.pdf）

宮川充司（2013）青年期以降の自閉症スペクトラム障害と未診断事例　椙山女学園大学教育学部紀要，6, 79–89.

宮澤淳一（2004）グレン・グールド論　春秋社

西原理恵子・小林凜（2016）【日めくり】学校川柳―ボクとワタシの，毎日をおかしむ発想―　教育開発研究所

岡南（2009a）視覚優位型の世界　杉山登志郎・岡南・小倉正義　ギフテッド―天才の育て方―　学研教育出版，pp. 41–53.

岡南（2009b）視覚優位型の子どもたちへの特別支援教育　杉山登志郎・岡南・小倉正義　ギフテッド―天才の育て方―　学研教育出版，pp. 55–67.

岡南（2009c）聴覚優位型の見え方の障害を支援する　杉山登志郎・岡南・小倉正義　ギフテッド―天才の育て方―　学研教育出版，pp. 69–83.

文部科学省初等中等教育局生徒課（2022）令和 3 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について（令和 4 年10月27日）（https://www.mext.go.jp/content/20221021-mxt_jidou02-100002753_1.pdf）

Ostwald, P. E. (1997) *Glenn Gould: the ecstasy and tragedy of genius*. New York & London, NY, UK: W. W. Norton.（宮澤淳一訳　2000　グレン・グールド伝―天才の悲劇とエクスタシー―　筑摩書房）

杉山登志郎(2009)アスペA型　杉山登志郎・岡南・小倉正義　ギフテッド―天才の育て方―　学研教育出版，pp. 27–40.

杉山登志郎・岡南・小倉正義（2009）ギフテッド―天才の育て方―　学研教育出版

特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学級における指導・支援の在り方等に関する有識者会議（2021）特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学級における指導・支援の在り方等に関する有識者会議アンケート結果まとめ　令和3年11月1日第4回特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学級における指導・支援の在り方等に関する有識者会議資料（https://www.mext.go.jp/content/20211105-mext_kyoiku02-000018576_01.pdf）

特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学級における指導・支援の在り方等に関する有識者会議（2022）特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学級における指導・支援の在り方等に関する有識者会議　審議のまとめ～多様性を認め合う個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の一環として（令和4年9月26日）　文部科学省（https://www.mext.go.jp/content/20220928-mext_kyoiku02_000016594_01.pdf）

東京大学先端科学研究センター中邑研究室編（2021）学校の枠をはずした―東京大学「異才発掘プロジェクト」の実験，凸凹な子どもたちへの50のミッション―　どく社

Wing, L. (1981) Asperger's syndrome: a clinical account. *Psychological Medicine*, **11**, 115–129.

Wing, L. (1996) *The autistic spectrum: a guide for parents and professionals*. London, UK: Constable.（久保紘章・佐々木正美・清水康夫訳　自閉症スペクトラム―親と専門家のためのガイドブック―　東京書籍）